ウィトゲンシュタイン『哲学探究』を読む

【心の哲学続編】

AIゼミ 哲学特論 講義録

> 「哲学の問題とは、言語が休暇を取るときに生じる。」
> —— ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン

はじめに ——「続編」の意味について

さて、諸君。今日は心の哲学の続きをやります。前回はデカルト的二元論から始めて、クオリアの問題、デネットの批判、チャーマーズのハード・プロブレムまでを駆け足で走り抜けた。諸君の頭の中には、まだその残像があるはずだ。

ここで一つ、質問をしよう。「痛い」という言葉は、痛みそのものを記述しているのか？

「何を当たり前のことを」と思うかもしれない。痛いと言えば、痛みを報告しているに決まっている、と。しかしウィトゲンシュタインはここで立ち止まる。本当にそうか？ 「痛い」という言葉は、内側で燃えている何かの名前なのか。それとも、「痛い！」と叫んだり、顔をしかめたりする自然な反応を洗練させたものなのか。

この問いが、今日の講義全体を貫く一本の糸だ。

ちなみに余談だが、ウィトゲンシュタインという人物は本当に変わった男でしてね。ケンブリッジの超エリートでありながら、ノルウェーの山奥に小屋を建てて何年も一人で籠ったり、第一次大戦に志願兵として出征して塹壕の中で『論理哲学論考』の草稿を書いたりする。ラッセルに「天才かもしれないが、狂人かもしれない」と言われた男です。おそらく両方だったでしょうが。さて、本題へ。

第一章　前期から後期へ ——「蝶番」としての思想転換

1-1 『論考』の野心と限界

ウィトゲンシュタインの前期主著『論理哲学論考』（1921年）は、ある意味で西洋哲学史上もっとも野心的な著作の一つだ。その核心的なテーゼはこうだ。言語は世界を写像する（**picture theory of meaning**）。 命題とは事実の論理的な絵であり、有意味な言語は世界の中に対応物を持たなければならない。そして哲学的な問い—神、自由、倫理、魂の不死—は、この基準から外れた「無意味な問い」なのだと。

『論考』の最後の言葉は有名だ。「語りえぬことについては、沈黙しなければならない。」 これは哲学からの逃避ではなく、治療の宣言だ。哲学的混乱は言語の誤用から生まれる。なら、言語の正しい使用法を明確にすれば、問題は「溶解」する。

ところが、だ。

ケンブリッジを去り、小学校の教師をしながら（これがまた大変な話で、彼は生徒を殴ったとして訴えられもするのですが）、ウィトゲンシュタインは気づいてしまう。言語の写像説はあまりにも単純すぎる、と。

1-2　スラッファの膝蹴り

転換点として語り継がれるエピソードがある。イタリアの経済学者ピエロ・スラッファは、ウィトゲンシュタインの言語=写像説を聞いて、手のひらをあごの下から前方向にはじくジェスチャーをして言った。「これの写像は何だ？」

ナポリ語で「知ったことか」を意味するこのジェスチャーは、何の事実を写像しているのか。「写像できない」なら無意味なのか。そんなはずはない。これは明らかに何かを「意味している」。

この一撃が、前期ウィトゲンシュタインの言語観を崩す。そして後期の探究が始まる。言語は写像ではなく、行為だ。実践だ。生活だ。

第二章　言語ゲームという発想

2-1 「意味」とは使用である

『哲学探究』（1953年、没後出版）の冒頭で、ウィトゲンシュタインはアウグスティヌスの言語習得論を引用する。子どもは大人が物を指差しながら名前を言うのを聞いて言語を覚える、という素朴な見方だ。

これに対してウィトゲンシュタインは問う。果たして「指差し」は曖昧ではないか。 あなたが林檎を指差して「これ」と言ったとき、あなたは「赤さ」を指しているのか「丸さ」を指して

いるのか「この特定の物体」を指しているのか。文脈なしには、指差しの意味は確定しない。

『哲学探究』§43に、後期ウィトゲンシュタインの核心命題がある。

「多くの種類の言葉について、その意味は使用である（**the meaning is the use**）。」

「使用」というのは何か。それは言語ゲーム（**Sprachspiel**）の中での役割のことだ。言語ゲームとは、言語と行為が絡み合った活動の総体を指す。命令し、従う。説明し、理解する。嘘をつき、見破る。祈り、感謝する。これらすべてが言語ゲームだ。

2-2　言語ゲームの多様性

重要なのは、言語ゲームは一つではないということだ。ウィトゲンシュタインは、哲学的な誤謬の多くは一種類の言語ゲームの文法を別の言語ゲームに適用することから生じると考える。

例を出そう。「痛みがある」という言語ゲームと、「テーブルがある」という言語ゲームは、同じ文法的形式を持っている。どちらも「Xがある」という形だ。しかし、これが同じ種類の主張だと思うと、哲学的に迷子になる。

「テーブルがある」という言明は検証可能だ。見て、触って、確かめられる。では「痛みがある」はどうか。あなたは自分の痛みを「見て」確かめるのか？　痛みの「存在」とは、いったいどういう意味なのか。

ここに心の哲学への橋がかかる。

第三章　私的言語論証 ——「内的経験」という罠

3-1　私的言語とは何か

さあ、ここが今日最大の山場だ。ここを理解しないと、後の心の哲学の議論がまったくわからなくなる。

私的言語（**private language**）とは、原理的に他者には理解できない、自分だけの感覚を記述する言語のことだ。

普通、私たちは言語を他者と共有している。「赤い」「熱い」「痛い」は公共の語彙だ。しかし、こう考える哲学者がいる。私の「痛み」の感覚は、本質的には私だけがアクセスできる内的状態ではないか。あなたの「赤い」の経験と私の「赤い」の経験が同じかどうか、原理的には確かめようがない（逆転クオリア問題はまさにここだ）。なら、私は自分の内的状態に対して、私だけに通じる「名前」をつけることができないか。

これが私的言語の発想だ。デカルト的な内省主義と親和性が高い。心の中に確実な知識の礎があり、それを指し示す言語がある、という考え。

ウィトゲンシュタインはこれを根底から否定する。

3-2 「S」という名前をつける実験

§258での思考実験を丁寧に追ってみよう。

今、私はある感覚を覚えている。私はそれに「S」という名前をつけようと決める。私は日記に「今日、Sを経験した」と書く。これは意味をなすか。

一見するとそうだ。しかし、ここで重大な問題がある。「**S**」が正しく適用されているかどうかの基準は何か。

通常の言語では、間違いを正すことができる。「これは赤い」と言ったとき、他者が「違う、それは橙だ」と訂正できる。辞書があり、訓練があり、慣習がある。しかし私的な感覚「**S**」に関しては、私には「正しい適用」と「正しいと思っている適用」を区別する手段がない。

§258で彼は言う。何が正しいかは、私が正しいと思えることであるが、それは「正しさ」を語ることができないことを意味するだけだ。「正しいと思う」だけでは「正しい」とは言えない。

これは深い。正しさとは、あるゲームの中でのルールへの合致を意味する。そしてルールは本質的に公共的だ。私的ルールというのは矛盾語法（oxymoron）なのだ。

3-3　ここで少し脱線します ——クリプキの悪魔

諸君、ちょっと面白い話をしよう。これは脱線ですが、試験には出るかもしれません。

哲学者のソール・クリプキは1982年に『ウィトゲンシュタイン　ルールと私的言語』という本を書いた。そこに登場するのが「クワス（quus）」という概念だ。

あなたが今まで「＋（プラス）」という記号を使って計算してきたとする。2+2=4、3+5=8、などと。しかしここで悪魔が囁く。「いや、あなたが実は従っていたのは『クワス算』かもしれない。クワス算では、57を超える数については答えは常に5だ。あなたはこれまで57を超える計算をしたことがないから、これまでの実績では区別できない」と。

どうやってあなたは「プラス」のルールに従っているのであって、「クワス」のルールに従っているのではないと示せるか。 これが「クリプキのパラドックス」または「クワス問題」だ。

ルールを定義する事実が内側にあるとしたら、何がそれを保証するのか。クリプキはここに懐疑論的解決を提案するが、これについては後でまた触れよう。

第四章　甲虫の缶の比喩 ——クオリア問題への一撃

4-1　§293の思考実験

『哲学探究』§293はおそらく心の哲学に対して最も直接的な影響を与えた節だ。全文を読んでみよう（私の訳）。

> 「各人が甲虫の入った缶を持っているとする。誰も他人の缶の中を覗くことはできないし、誰もが『甲虫』という言葉を自分の甲虫を見ることで学んだとする。この場合、『甲虫』という語の使用がコミュニケーションで機能しているとすれば、甲虫は言語ゲームの中でまったく役割を果たしていない。縮れて消えてしまうかもしれない。缶の中の何かが何であれ、それは言語ゲームの外で相殺される。」

これを「痛み」に当てはめよう。各人が「痛み」という言葉を学ぶとき、自分の私的な感覚を通じて学ぶとしよう。しかし、その私的な感覚そのもの（クオリア）は言語ゲームの中で機能するか？

ウィトゲンシュタインの洞察によれば、機能しない。 私たちが「痛み」という言葉を使って何かを伝えるとき、「私的なクオリア」ではなく、痛み行動、痛み表現、文脈的なルールが機能している。缶の中の甲虫（= クオリア）は、コミュニケーションの観点からは余剰なのだ。

4-2　デネットはここから読んでいる

前回触れたデネットの「クオリア否定論」は、この洞察を引き継いでいる。デネットが言う「ヘテロフェノメノロジー（異種現象学）」とは、主観的報告を第三者的に分析する手法だが、その背景にあるのは「クオリアそのものを科学的に扱う必要はない、行動と機能状態を分析すれば十分だ」という発想だ。

しかし注意が必要だ。ウィトゲンシュタインはクオリアが「存在しない」とは言っていない。彼が言っているのは、「クオリア」という概念を私的言語の文法で扱おうとすること自体が哲学的混乱を生む、ということだ。問いの解消（dissolution）と問いへの否定的回答（denial）は違う。

チャーマーズはこの区別に敏感で、だからこそハード・プロブレムをウィトゲンシュタイン流には「溶解」できないと主張する。諸君はどう思うか。

第五章　他者の心 ——「哲学的ゾンビ」との対話

5-1　行動主義批判から始める

心の哲学における「他者の心の問題」はシンプルに表現できる。他者が意識を持っているという確信の根拠は何か。

行動主義（behaviorism）は一つの答えを出す。心的状態とは行動傾向のことだ。痛みとは「痛い！」と叫び、顔をしかめ、傷口を押さえる傾向のことだ。こうすれば他者の心は観察可能な行動から推論できる。

しかしこれには問題がある。哲学的ゾンビ（**p-zombie**）だ。

人間とまったく同じ行動をとるが、内側には何の意識経験もない存在。これは論理的に可能か。チャーマーズは可能だと論じ、それゆえ意識は機能的・行動的に定義できないと主張する。行動主義的な心の理論は不完全だ、と。

5-2　ウィトゲンシュタインの「他の顔」論法

ウィトゲンシュタインは、他者の心の問題に対して独特のアプローチを取る。

『哲学探究』§281では、こんな問いが立てられる。「機械が痛みを感じるか？」 普通これに答えるとき、私たちは機械の構造を調べる。でも、こう問われたら？ 「石が痛みを感じるか？」

私たちはほとんど迷わず「いや」と答える。なぜか。石には生命の形式（**Lebensform**）がないからだ。

ウィトゲンシュタインにとって、心的概念の適用は行動への反応の中で学ばれ、その学びの場は「生命の形式」を共有する存在たちの間にある。 私が他者の痛みを知るのは、推論によってではない。私は人間の顔と行動に対して「即座的確実性（Gewissheit）」を持って反応する。

§283に印象的な一文がある。「見よ、人間の身体は人間の魂の最良の絵だ。」

これは唯物論ではない。魂を身体に還元しているのではなく、心的概念が適用されるのは身体を持ち生きている存在との関わりの中においてだ、という主張だ。

5-3　哲学的ゾンビは何がおかしいのか

さて、ここから少し踏み込もう。ウィトゲンシュタイン的観点からすると、「哲学的ゾンビ」の概念にはどんな問題があるか。

哲学的ゾンビとは、あなたとまったく同じ行動をするが内側に意識がない存在だ。しかしこの「内側に意識がない」という部分を考えてみてほしい。「ある存在が行動的には完全に人間であるが、意識がない」という命題は、実は何を意味しているのか。

ウィトゲンシュタインなら問うだろう。「意識がない」という言語ゲームはどんな文法に従っているか。私たちが「意識がある」「意識がない」という言葉を使うのは、どんな脈絡においてか。植物に対して、石に対して、昏睡状態の人に対して。

これらの文脈での「意識がない」の使用から、哲学的ゾンビに対するそれは論理的に連続しているか？　行動的に完全に同一な存在に対して「意識がない」と言うことは、私たちの言語ゲームの文法から逸脱していないか。

これは「ゾンビは存在できない」と言っているのではない。その概念が一貫して使用できているかどうか、疑義を呈しているのだ。

第六章　アスペクト知覚 ——「見ること」と「見えること」の間

6-1　アヒルとウサギ

ここで一つ有名な図を思い浮かべてほしい。「アヒル-ウサギ図（duck-rabbit）」だ。あの図は、見方によってアヒルにもウサギにも見える。

ウィトゲンシュタインはこれを素材に、「アスペクトを見る（**seeing-as**）」という現象を掘り下げる。

一つの同じ図が、一瞬にして「アヒル」から「ウサギ」に転換する。この転換の瞬間、何が変わったか。紙の上のインクは変わっていない。しかし何かが変わった。

「私には今、ウサギが見えている」という報告と、「紙の上にこういう線が引かれている」という報告は、同じ種類の言語ゲームか。

ウィトゲンシュタインの答えはノーだ。アスペクトを見ることは、ものを見ることでもなく、純粋な解釈でもなく、その中間にある独特な現象だ。

6-2　なぜこれが心の哲学に重要か

このアスペクト知覚の分析は、心と意識の研究に重要な示唆を与える。

意識的経験は、単なる感覚入力（センスデータ）の集積ではない。 私たちはある「アスペクト」のもとでものを経験する。価値、文脈、注意、期待が経験の「内容」そのものを構成する。

これは認知科学・神経科学の主流の知見ともつながる。予測的符号化理論（predictive coding）は、脳はトップダウンの予測モデルによって感覚入力を解釈すると主張する。私たちが経験するのは「生の感覚」ではなく、すでに解釈された世界だ。

ウィトゲンシュタインは神経科学者ではなかったが、彼の概念分析は驚くほど現代の研究と共鳴する。

第七章　確実性の問題 ——「疑い」の限界

7-1 『確実性について』への回路

ウィトゲンシュタインの最晩年の草稿がまとめられた『確実性について』（Über Gewissheit, 1969年没後出版）は、心の哲学ともう一本の線を結ぶ。

ムーアの「常識論」への反論として書かれたこの書は、こう問う。「私はここに手があることを知っている」というムーアの言明は、本当に「知識」なのか。

ウィトゲンシュタインの答えは巧みだ。「知っている」という言語ゲームは、疑いうることを背景として初めて意味をなす。 しかし、すべての知識の土台には、疑いを超えた「蝶番命題（hinge propositions）」がある。「私は人間だ」「地球は長い間存在してきた」「私の手はある」——これらを疑うことは、言語ゲームを外れることだ。

疑いには根拠が必要だが、その根拠はさらなる疑いなしに受け入れられる地盤の上に立っている。 これはウィトゲンシュタインによる一種の基礎主義批判であり、同時にデカルト的懐疑論への回答だ。

7-2 「コギト」との対決

デカルトは「我思う、ゆえに我あり」で、疑いえない確実性を自己の思考の中に見出した。これが心の哲学の出発点だったわけだ。

ウィトゲンシュタインはこれに根本的に異議を唱える。「我思う」という言明は、すでに「思う」という言葉の言語ゲームを前提としている。 言語ゲームは公共的な実践だ。ならば、「我思う」の確実性は、デカルトが信じたように、あらゆる公共的なものに先行することはできない。

思考の自己証明的確実性と言語の公共性。どちらが先か。これはデカルトとウィトゲンシュタインの最深部での対立だ。

第八章　心の哲学への総合的インパクト

8-1　三つの貢献

さて、全体を整理しよう。ウィトゲンシュタインが心の哲学に与えた貢献を三つにまとめると、こうなる。

第一、私的言語論証による内省主義の批判。 心的状態を私的な内的対象として扱うモデル（デカルト的モデル）は、言語の公共性と矛盾する。「内的対象」のための私的言語は成立しない。

第二、言語ゲームという概念道具による問いの再編。 「意識とは何か」「クオリアは実在するか」「他者の心は知れるか」といった問いは、しばしば異なる言語ゲームの文法を混同することで生じる疑似問題かもしれない。問いの形を変えることが先決だ。

第三、生命の形式（**Lebensform**）という概念。 心的概念の適用は、生き物としての共有された活動様式の中に埋め込まれている。AIに意識があるか、という現代的問いも、この枠組みで問い直せる。

8-2　解消か、回避か ——批判的検討

しかしウィトゲンシュタインへの批判もある。そしてこれは重要だ。哲学において批判なき称賛は死だ。

チャーマーズをはじめとする現象学的意識論者が言うのは、言語ゲームを分析しても、「なぜ何かを経験することがあるのか」というハード・プロブレムは残る、ということだ。

仮に「痛み」という言葉の文法を完全に解明したとしよう。しかし「痛みの言語ゲームとは別に、痛みを感じることはどういうことか」という問いは依然として残るではないか。ウィトゲンシュタインは「それは疑似問題だ」と言うかもしれない。しかしその判断自体に、すでに立場が入り込んでいないか。

問いを解消することと、問いを逃げることは、どう区別するか。 これが後期ウィトゲンシュタインへの最大の挑戦だと私は思っている。

8-3　現代への接続点 ——AIと言語モデル

最後に、少し現代的な話をしよう。今、大規模言語モデル（LLM）が目覚ましい発展を遂げている。ChatGPT然り、Claude然り。こうしたシステムは「理解」しているのか、「意識」を持つのか、という問いが喧しい。

ウィトゲンシュタイン的に問えばこうなる。「**LLM**が理解している」という言語ゲームは成立しているか。

「理解」という言葉を私たちは人間の文脈で学んだ。問いに応え、誤りを認め、文脈を読む、そういった実践の網の中で。LLMがこの言語ゲームに参加できているとするなら、それはどういう意味で「参加している」のか。

ジョン・サールの「中国語の部屋」思考実験はここに来る。中国語を知らない人が規則書に従って中国語の問いに回答できても、「理解している」とは言えない、というあれだ。しかしウィトゲンシュタイン的観点から見ると、「理解」が言語ゲームへの参加であるなら、参加の「内側」に何があるかを問うことは、また別の甲虫の缶問題になる。

「内側に何があるか」ではなく「どう機能しているか」 ——この転換が、AIの意識を巡る議論でも生きてくる。

おわりに ——哲学することの意味

今日はだいぶ駆け足でした。ウィトゲンシュタインの『哲学探究』は、一行一行が論文一本分の密度を持っている。一学期かけても読み切れない本だ。

しかし今日の核心はシンプルだ。言語は思考を外側に表現する透明な媒体ではない。言語そのものが思考の形式を作っている。 そして「心」や「意識」や「クオリア」についての哲学的問いは、しばしばこの言語の文法への無理解から生まれている。

ウィトゲンシュタインが言う哲学の目的は「蠅に、蠅取り瓶から出る道を示すこと」だ（§309）。私たちは言語という瓶の中で、ブンブンと飛び回っている。出口を教えることが哲学の仕事だ。

しかし私はいつも思う。蠅取り瓶の外に出たとき、そこには別の瓶がないか、と。

ウィトゲンシュタインは言うかもしれない。「それも哲学的混乱だ」と。私は言い返すかもしれない。「その判断もまた一つの立場だ」と。

哲学は終わらない。だから面白い。

次回は、アンディ・クラークの拡張心論（extended mind theory）をやります。心は頭蓋骨の中にあるのか、という問いだ。スマートフォンはあなたの心の一部か。来週もしっかり読んできてください。

参考文献

- L. Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen* (1953) / 鬼界彰夫訳『哲学探究』（講談社学術文庫、2020年）
- L. Wittgenstein, *Über Gewissheit* (1969) / 黒田亘訳『確実性の問題』（大修館書店、1975年）
- S. Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language* (1982) / 黒崎宏訳（産業図書、1983年）
- D. Chalmers, *The Conscious Mind* (1996)
- D. Dennett, *Consciousness Explained* (1991)
- J. Searle, *Minds, Brains, and Programs* (1980)

©AIゼミ　無断転載お断り　ただし勉強の役に立つなら何枚でもコピーしなさい